EPA（関係性の教育学会）2012年度研究大会［http://epajapan.jimdo.com/］

2012年6月3日，大東文化会館

1.「大学１年生が学び直す「会話」としての文章表現」

出水 純二（尚美学園大学/非常勤）

2011年度の文章表現の授業におけるグループワークの不調、モチベーション低下など反省点から、2012年度には学生相互の「かかわりあい」をすすめるよう方向転換をしている。「文章は会話」であり、他の人が言っていることをどう自分の文章に取り入れ、どう応答するかに注目する。メディアに流通する文章から「会話」するための技法を「文型」の形で抽出して提示し使えるようすすめている。現在までの手ごたえ、課題などを報告する。

2.「「絵本」における「癒し効果」に関する考察」

山西 敏博（大阪大学大学院）

今日、さまざまな悩みや苦しみを抱えて生活をする人びとが増えている。とりわけ「3. 11」に関連する未曽有の不況により、自殺者も3万人を数えるとまで言われている。そのようななかで、本来は幼児・子ども対象の「絵本セラピー」をとりあげて、「絵本」から得られる大人への「癒しの効果」について実例をあげながら、参加者の方々とともに考えてみたい。

3. キャンセル

４「日本語を母語としない生徒に対する教育法」

王 力、佐藤 大紀（大東文化大学大学院英文学専攻）

群馬県にある ISC (International Community School))にて授業をおこなった。その授業の受講者は英語やポルトガル語、スペイン語を話す外国人の親を持つ日系の６歳〜17 歳の生徒である。大学院生が教師となり、各々テーマを決め、それにもとづいて授業である。その際、授業形態や参加意欲などを、どのような差があり、またどのように運営していくのが適当であるかを、実際の授業体験をもとに考察する。

５.「「教師 笹田 巌」にこめられたこと—授けないことで自立的、創造的思考を育む英語教育＝クリティカルシンキングの実践」

萱森 優・和田 さつき

英語情報にだまされない「クリティカルシンキング」（あらゆるリソースを批判的に検証）の実践を継続していくはずだった笹田 巌さん（1957-2009）の遺稿集『教師 笹田 巌』（第 1〜２巻）から実践例を紹介する。「授けない（生徒に教え込まない。教える時間は 10〜15%）」「主体的に学び発表する」授業、問いかけつつ、思考を引き出す」という手法で「教育は対話だ」という信念を貫かれた笹田さんと高校生（帰国生）との関係性（在り方）にも注目する。

5.「高等学校に於けるソーシャルワークを考える」

渡辺 岳

厚生労働省の発表によると、児童虐待の通告件数は全国で55,152件(2010)となっている。指数関数的に虐待件数は増加している。高校生が占める割合は５％程度だが、現実に高校現場でも虐待を疑わせる事例がみられる。文部科学省の学校基本調査では、学校が把握できていない行方不明の小中学生が千人を超えている。高校での基本調査にその項目はみあたらないが、保護者と絶縁状態になり家庭との連絡を断って学校を退学していく生徒が少なからずいる。ここでは、高等学校におけるソーシャルワークの必要性と児童相談所の役割について問題提起をおこなう。

6.「東日本大震災後のESDー選択的人間関係から共生的社会関係へ」

長岡 素彦（持続可能な開発ための教育の１０年さいたま）

東日本大震災後、被災地の学校と地域との連携のなかで生まれたESDおよび持続可能な社会に向けた教育実践や被災地の支援から生まれた教育実践を紹介し、参加者とともに考える。まず、依然厳しい岩手、宮城、福島の被災地の学校の状況について述べ、それらの授業実践を紹介する。そして、震災・復興、そして、その苦しみ、知恵から生まれてくる教育・行動が持続可能な世界をきずき、選択的人間関係から共生的社会関係を生みだすことを参加者と考える。

7.「地域共創・NPOインターンシップにおける多世代共学・異世代協働ー地域に参画する学びから地域を共に創る学びへ」

長岡 素彦（ソーシャルプロデュースネット）

新しい公共支援事業の地域共創・NPOインターンシップで学生インターンが、1) NPO活動に参加、2) SB（ソーシャルベンチャー）企画立案に参画、3) SB立ち上げ活動を実践するという3つのフェーズを体験することで社会人基礎力を獲得すると同時に、地域づくり、SBをおこなった事例を論ずる。そして、地域共創・NPOインターンシップにおける学びが多世代共学・異世代協働の関係をきずき、それが地域に参画する学びから地域を共に創る学びへ発展していったかを論じたい。

8.「持続可能な地域と社会をみすえた学びのあり方」

松田 剛史（北海道大学大学院文学研究科）

現代の地域や社会が直面するさまざまな問題の解決に必要な要素は何か。また問題を課題化し，取り組むにはどのようなしかけやしくみが効果的なのか。地域のもつ潜在的な力の発掘や人びとのつながりやかかわりがもつ価値の認識化，雇用創出を視野に入れたはたらき方づくりなど，生涯学習／社会教育の観点からその可能性と効果について検証した。また，学校教育とのかかわりにもふれ，キャリア教育や持続可能な開発のための教育の視点からも考察する。

９.「大学生が考える緑地保全活動の参加促進に関する方策」

高瀬 唯、古谷 勝則（千葉大学園芸学研究科）

市民による緑地保全活動において、参加者の不足が問題となっている。とくに若者による参加が少なく、団体の高齢化が目立つ。そこで、若者である学生を対象とし「どうすれば学生が保全活動に参加しやすくなるか」をテーマにグループディスカッションをおこなった。そして、参加する際の問題点として、費用、活動情報、活動場所、活動への興味関心などが、あきらかとなった。